



観点別評価 — 悩みの根っこ

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 観点別評価再考

観点別評価が、中学校に導入された頃、この評価の方法についての研修会がかなり頻繁に行われていた。観点別評価については、『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』(国立教育政策研究所教育課程研究センター、2002)が刊行され、その中の第9章が「外国語」であった。この参考資料では、観察による評価がかなり強調されていたために、どのようにして観察評価を行うべきか(その実践方法や、そうして集められた評価資料の総括の方法など)についての説明に、かなりのページが割かれていた。

この観察による評価そのものは、現行学習指導要領とともに配布された、次の『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 外国語)』(国立教育政策研究所教育課程研究センター、2011)では、だいぶトーンダウンした形だ。2011年版の参考資料では、2002年版とは逆に、「評価方法」の欄では、「後日ペーパーテスト」の文言が目立つようになり、そのペーパーテストについても、「教科書とは異なる物語を読むペーパーテストにおいて」という文言にも象徴されているように、かなり具体的に踏み込んだ記述となっている。

観点別評価の導入時に、この観察による評価とともに、当初よく議論されていたのが、ある問題形式によるテスト結果をどの観点として扱うかというものであった。今日では、あまりこのような議論が起ることはなくなったので(そもそも、観点別評価に関する研修の機会が激減したのだが)、良くも悪くも、それぞれの教員あるいは学校の中で、ある一定の形で、落ち着いたということであろう。

今回の原稿では、こうした議論がそもそもなぜ起こったのか、その落ち着き方がはたして本来あるべきものであったのかなどについて考えてみたい。

2. どの観点に含まれるかの判断

ある問題形式によるテスト問題の結果をどの観点として扱うかという議論の中で、よく話題となったのは次のような問題であった。それは、英語の単語の英英辞典の定義を読んで、その定義を表わしている単語を推察して書くという問題である。

この問題の結果を4観点のどれに入れるかについて、ある講演で中学校の先生方に尋ねたところ、その判断は、「理解の能力」「表現の能力」「言語や文化についての知識・理解」と3つのカテゴリーにきれいに3分の1ずつに分かれた。

それぞれの理由は、

- ・定義を「読んでいる」ので「理解の能力」とする。
- ・単語を「書いている」ので「表現の能力」とする。
- ・「単語」の知識を問うているので「言語や文化についての知識・理解」とする。

というものだった。

今から思えば、単語だけを書かせて、それで「表現の能力」とするというのは、説得力がないようにも思われるかもしれない。しかし、当初は、「単語でも書いているのだから、『表現の能力』である」というような考えを持つ人達も少なくなかったのも事実である。

講演では、私は、このような問題については、「自己表現」に当たる要素が含まれず、また、書かれているのが「単語」だけということもあり、「表現の能力」には当たらないとした。その上で、これが「理

解の能力」を問うているのか、「言語や文化についての知識・理解」を問うているのか、については、その問題によらしていた。つまり、問われている単語自体は誰でも知っていて、定義の文の理解が問われるような問題であれば、それは「理解の能力」を問うているし（以下の①）、定義の文自体は誰でもある程度読めるようなものであるが、その単語の知識の有無に差があるような問題であれば、それは「言語や文化についての知識・理解」を問うている（以下の②）という具合である。

① the clear liquid without colour, smell, or taste that falls as rain and that is used for drinking, washing etc

答え：water

② 12 o'clock at night 答え：midnight

（定義は①②ともにLongman Dictionary of Contemporary English 5th Editionによる）

このような議論は、他の問題形式についても起こった。並べ換え問題では、「表現の能力」として扱うか、「言語や文化についての知識・理解」として扱うかの議論があった。与えられた語句をもとに作文をしていると考えれば、「表現の能力」を見ていることになるし、文構造の知識を見ていると考えれば、「言語や文化についての知識・理解」を見ていることになる。

総合問題の場合は、英文の理解を問う問題がほとんど入っていないにもかかわらず、英文が出ているというだけで「理解の能力」を問うているとしているケースが多々あった。しかし、これに対しても、英文は単なる素材であり、見ているのは文法の知識であったり、語彙の知識であったりであるから、その問題の結果は「言語や文化についての知識・理解」として扱うべきである、とする人達も当然いた。

3. 問題の本質

観点の判断は、解答の中心となる知識・技能によらとする私の判断自体は、今でもあまり変わっていないが、あるときから、この問題の本質は何だろうかと思えるようになった。教師がこのような悩みを持つのはなぜか。その理由は、これまでと同じよう

なテストを行いながら、それぞれの問題の結果が4観点のどこに行くかと考えてしまうことにあるのではない。

本来は、手順が逆だ。つまり、まず指導目標と到達目標を決めて、その目標への到達の有無を見るためにはどうしたらいいかを考えるべきなのだ。評価方法を「テストによる」としたら、まずはどのようなテスト問題が最適かを考えるのである。「表現の能力」なら、その「表現の能力」を見るには、どのような問題がいいかを考える。「言語や文化についての知識・理解」なら、その「言語や文化についての知識・理解」を見るには、どのような問題がいいかを考えるべきなのだ。

テストありきの 観点別評価の手順	評価規準に基づく 観点別評価の手順 (テストを選択した場合)
(教科書の)指導 ↓ (従来型の) <u>テスト問題の作成</u> ↓ 問題ごとの 評価観点の決定	到達目標の設定 ↓ 評価規準の作成 ↓ 評価方法の決定 (テストを選択) ↓ テスト方法の決定 ↓ <u>テスト問題の作成</u>

こう考えれば、観点別評価のためのテスト問題の作成手順は当然異なってくる。上の右表のように作れば、「表現の能力」を見る問題は、「表現の能力」を見るのに相応しい問題になるであろうし、「言語や文化についての知識・理解」を見る問題は、「言語や文化についての知識・理解」を見るのに相応しい問題になるであろう。あえて、観点と観点の境界線上の問題を選んで出す必要などないのだ。

観点別評価が導入されて10年以上たった。良くも悪くも落ち着き、観点を悩むことはなくなったかもしれない。しかし、テストは昔と変わっておらず、観点別評価に対応する構成になっていないような場合も少なくない。今一度、「評価規準」に基づくテスト方法の見直しをしてみてもどうだろうか。